その名「ミキ」の意味するところ

豊後孝江

一、怒りんぼ先生に賞めて貰ったこと

ミキ先生が風邪から肺炎になられ、入院加療、退院後自宅療養に入られてから黄泉の国へ旅立たれるまで、時折お邪魔して歌を唄ったことがある、時に本を読んだこともあった。こんな時、いつもおっしゃった言葉は「わたしは、歌は唄わんが、その歌の意味はようわかるよ。歌の意味がいいね」「あんたは唄がうまいのォ。気持が伝わって来るよ」……といって手をつないで拍子を取っておられた。歌は何でもよい。ただ、恋・愛は嫌い。こんな状態も平成五年九月頃まででであったろうか。十月に入り、大学祭の頃にはあまり拍子は取られなくなったし、十二月初

めになると、どんな歌でも子守歌のように、直に眠ってしまわれた。

若し、ミキ先生より、少しだけでも私に出来ることがあったとしたら、それは歌を唄うことでした。怒りんぼ先生に、心から褒めていただき、うれしがって大きな声でよく唄った。

今ひとつは、授業が終わってから見舞った時は、やはり心は家路へ、落ち着いていない。こんな時は心の底を見抜かれたように、「長ごうおらんでもええけェ、再々来てよ。」それから、決まって付添いさんに「この人はね、遠くからよーく通うて来た。お姑さんもいて、ご主人にも尽くしてきた、子供もいる。よーやったのォ。仕事もよーやった……」と言われた。この言葉は大変うれしかったが、『武田ミキ人間教育論』にも書いたように、ミキ先生にはかなわない。でも、うれしいことの一つであった。ミキ先生のもとで三十年、色々と勉強させて貰ったが、長い間に私も同じ「怒りんぼ豊後」になっている。「褒めて躾けよ。」と最後に教えられた気がしている。

二、病人との付き合い方の教え

お年寄り、あるいは病人はとても寂しがり屋になり、人が訪ねてくれることを待ってはいるものの、時にいやがることもしばしばである。ミキ先生の病床中に、帰り際の挨拶を教えられた。ある時「それでは帰りますね」といったら「帰ると言うものではない。『また来ますね』と言いなさい。」これは大変意味深長な言葉だと思っている。

平成四年三月に入院、俗に「生死をさ迷うこと一か月余り」、退院は九月末であったから約半年の闘病生活であった。しかし、退院当時の頃が一番お元気であった。一時間でもそれ以上でも話をなさったり、歌を唄ってもよかったが、平成五年の夏頃からは、薄紙を剝ぐようにの例えの反対で、薄紙を一枚一枚張り重ねる如く弱っていかれ、「どうも意欲がでん！」と嘆かれた。こんな状態になると、長い時間居ると苦痛の様子で、「長い間居らんでもい

いから、再々来てね」とおっしゃるようになった。沢山の会話の中から年寄りや病人との付き合い方の教えである。

三、歌からミキ先生の心を偲ぶ

色々な歌から、ミキ先生の心を偲ぶと、やはり学園歌、一番喜ばれた歌も学園歌であった。学園歌はミキ先生の作詞になり、本当にいい歌詞であるが、ちょっとくどくて間違い易い所もある。素直に感想を申し上げると、御自身もそれは認められ、「わしの教育はこれでもか、これでもかと欲張ったところがあるからね」とおっしゃった。まだまだ意欲的で、もう一度学長室へと思っておられた頃には、間違うと「違う」と叱られて、必ず「しっかりと教育しなさいよ。頼むよ。」が付け加えられた。しかし、秋風とともにお叱りもなく、仏様のようになられた。

真面目を絵に書いたようなミキ先生。好きな歌は、小学唱歌。小学三年生の数え歌も、お好きな歌の一つであった。なかでも三番の

「三つとや、みきは一つの枝と枝、仲よく暮らせよ、兄弟・姉妹。」

親の顔も知らないと嘆かれる先生に「ヲミキ」(注) と名付けられた因縁がここにあるように思われてならない。

これを書いた日に、出雲の卒業生 (三期生) の一人から年賀状が届いた。

「先日、大学よりの広報を拝見しました。

ミキ先生が、ご病気とは知りませんでした。先生は私達文教卒業生の誇りです。

『もっともっと頑張って下さい』

とお伝え下さい。」

もう、彼女は、ミキ先生の訃報を知っているのだろうか。こんな気持の卒業生に何と話してやればよいのだろうか。教職員は勿論、園児、生徒、学生、卒業生はすべて「ミキ」の枝である。

学園長亡き今こそ、何としても枝たる我々は、心を同じくして、仲よくし、武田学園という「ミキ」を守らねばならないと思う。

（注）戦後「ヲミキ」を「ミキ」と改名されたという。